

優秀賞

「 幸せと可能性 」

公共学科 4年 田熊 紫織

私は生きてるだけで十分だなんて綺麗事だと思っていた。

2024年の夏、死ぬまでにやりたいことリストにチェックが入った。無人島に行くという夢が叶ったのだ。

全員初対面で挑んだ無人島生活。年齢も性別も立場も関係ない環境で共に過ごした2泊3日は、これからの長い人生の中で間違いなく転機となることだろう。

私たちは生きることの難しさを実感した。家も水道もガスも電気も風呂もトイレもない状況で、初めて会った人たちと全力で生きる。ご飯を作るために火起こしをする。初めは火の起こし方も分からなかった。火起こしを始めて3時間半。試行錯誤しながらも私のチームの火が灯ることはなかった。けれど一度も弱音が出ることはなかったし、色々な可能性を信じて意見を出し合ったこの3時間半が無人島生活で一番楽しかったと言っても過言ではない。

食べる物は自分たちで調達する。決して満腹にはならない。それが幸せだった。時間に縛られず、お腹がすいたから漁をして、楽しかったから歌った。みんなスマホの存在なんて忘れていた。この生活で幸せという言葉は何回使ったわからない。

人生は無限に生き方と可能性がある。そう感じる事ができた無人島生活だった。家を捨ててヒッチハイクをしながら日本を放浪中の人、世界一周したいから仕事を手放す予定の人。やりたいことに全力で向き合う人の姿は輝いていて、私もそんなふうになりたいと思った。時間や世間に縛られない生活はあまりにも非日常で、こんな世界が広がっていることにも気付いた。今ならなんでも出来るような気がするし、失敗も全然怖くないと思える。

今はもう、生きてさえいればなんとかなるし、十分だと思う。生きることは大変なことだと学ぶことができたから。

この夏の出来事はこれからの人生の中でかけがえのないものになるだろう。この幸せをずっとずっと抱えて生きていきたい。